



集中治療室（ICU）の前に立つ人影が、二つ。  
窓から漏れる明かりがうっすらと半身を照らしていた。

恒彦と憲一だった。

「僕が余計な事を言わなければ、彼女は…」  
「いい、済んだ事だ。君は知らなかったんだからな」  
「しかし…」  
「遅かれ早かれ、カナは思い出さねばならなかったんだ。いつまでも偽りの平穏の中で暮らすのはカナ自身の為にならない、それは判っていた事なんだ」

沈みきった顔で傍らに立つ憲一を振り返ることもせず、恒彦はICUに横たわる娘の姿を凝視していた。  
固く握られた拳がミシミシと音を立てる。

「このままでもいいんじゃないかと何度も思ったよ。加夏子があ的事件を忘れていたら、不自由な軀のままでも、私や紗季子が一生、あの子の支えになってやればそれでいいと… だがな、ひとひとり生きてゆかねばならないんだ。あの子の一生が終るその日まで、私達が付き添ってやる訳にはいかないんだよ。いつかは先に逝かねばならない。だが…」

ゴンッ！

恒彦の大ぶりの拳がICUのぶ厚いガラスを叩いた。

「君の帰国は速水君から聞いて知っていた。止めるべきだったよ。甘かった」

後悔と懺悔の入り混じった、血を吐くようなひと言だった。

暫くして医師が一人、ICUから出てきてマスクを外した。

「先生、娘は…」

感情を押し殺した声で恒彦は医師に尋ねた。

「既に三回、蘇生処置を施しています。残念ですが、この様なケースは現代医学では対処し切れません。最悪の事態も覚悟しておいて下さい」

沈痛そうな顔に、お手上げの四文字を張り付けた医師が告げる。

「それが医者と言うセリフかぁ！ 何とかせんか、娘を助ける！ 助けるんだぁ！！」

抑えていた感情が一気に爆発した。

絞め殺さんばかりの勢いで恒彦が白衣の襟を絞め上げる。

止めに入った憲一を跳ね飛ばした彼は鬼の形相であった。

ヤメテッ！

廊下の隅から声があがった。

待ち合いのソファに俯いて座ったままだった紗季子の叫びだった。

「…止めてください、アナタ…」

幽鬼のような顔のままジッと恒彦を見ている。

彼の動きが止まった。

その時。

足音が近づいてきた。

銀さんと、彼に支えられた殉だった。

「僕に… ボクにやらせて下さい」

三人が三人とも殉を見た。

.....

そうではなかった。

虚ろだった紗季子の目が大きく見開かれていた。

殉の隣りで、銀さんもまた凍りついたように立ちすくんでいた。

◇

ベットに横たわる加夏子。

その横に置かれた椅子に、膝を揃えて背をピンと伸ばした殉が瞑目して座っている。

既に15分が経過していた。

「いきなり現れて『任せてくれ』って。彼も患者ですよ？ 顔色だって酷く悪いし…」

そう恒彦へ問掛けた憲一自身、今は藁にもすがりたい気持ちだった。

「医者がさじを投げたんだ。相手が死神でも取引するよ、今は」

恒彦もまた、憲一と同じ気持ちであった。

困惑した表情の中に、微かな望みにしがみつくと必死さが見え隠れしていた。

「彼は何をしようとしているんだ」

「多分、お嬢さんの心の中に入ろうとしてるんじゃないかと思う」

恒彦に問われ、さっきから妙に緊張した表情の銀さんが答えた。

「そんな事が出来るのかね？ あの半病人のような少年に」

「判らねえ。確かにあの坊やには不思議な力がある。現場で何度もそれらしい場面を目にしてきた。だか死にそうな子を蘇らせたなんて事は無かった」

憲一がはっと顔をあげた。

「もしかして…サイコイン…なのか」

「なんだ憲一くん、そのサイコ何とかというのは」

「サイコロジカル・インターフィアランス（精神干渉）。大学で以前、心理学の教授が特殊事例の一つとして講義した事がありました。他人と同調し、そこに何がしかの影響を及ぼす人間がいる。現象としては様々ですが、彼等の行いを総称して精神干渉、サイコインと呼ぶそうです」

「スプーン曲げみたいなもんか」

落胆した様子で恒彦が言った。

「超能力とは違うそうです。教授は言っていました、ある意味『常能力』である、と」

「…コーヒー、買ってきますね」

紗季子がゆらりと立ち上がると、精気の無い足取りで自販機コーナーへ歩き出した。

ふらふらと廊下の奥に消えてゆく。

「俺も一度、当直の所へ戻ります。清水さん、坊やを信じて、ここは任せてやって下さい」

一礼すると、銀さんも紗季子の後を追うように暗い廊下を歩き去っていった。  
残された恒彦と憲一は、ただ祈るしかなかった。

◇

廊下の突き当たり。そこを折れて少しいった所にある、非常灯の下の自販機前。  
歩いてきた銀さんの前に、小柄な和服の女性が立っていた。

紗季子だった。

「こんな所で会うとは思わなかったわ、久我さん」

「サキ…」

二人を囲む空間だけが、鈍く時を凍らせていた。

銀さんと紗季子。

どちらも、相手の目を底まで覗き込むように見つめ合ったままジッと動かなかった。

先に口を開いたのは銀さんだった。

「…元気、だったか？」

紗季子が固い表情のまま微笑む。

「おかげさまで…っていうのはおかしいわね、勝手に居なくなったひとには」

「…」

「6年、かしら」

「7年だ」

「そう」

感心無さげに目をそらすと、ハンドバックから細いメンソールの煙草を取り出し火をつけた。

先程までの脆く崩れ落ちてしまいそうな佇まいの下から、何処か下卑たふてぶてしさのようなものが姿を現していた。

「タバコ、まだ吸ってるのか」

「余計な御世話。7年で変わるものもあれば、変わらないものもあるのよ」

「俺は…」

言い淀む銀さんに構わず、紗季子が言葉を続けた。

「あの日、貴方は死んだと思った。ビールでも買いに行くようにフラリと部屋から出て行って、それっきり。店にも来ない。電話も何も繋がらやしない。夜が怖かった… 真っ暗な部屋で枕を抱えて、帰らないかも知れない男を待つ女の気持ちって知ってる？」

フウ〜っと煙を吐き出す。

「そして翌朝の新聞。『中華街で発砲事件。死者、負傷者合わせて9人』私がどんな気持ちでそれを読んだか、アナタにはわからないでしょうね」

紗季子の目の光が強くなった。

「あの時、死んだよ。ここに居るのは生まれ変わりか、死にぞこないなのか、俺にも判らねえ」

非常灯が照らす銀さんの横顔には、疲れ切った老人のように深い皺が刻まれていた。

「結婚…したんだな。まさかあの嬢ちゃんの母親がサキだとは思わなかったよ」

「一年も入院してたのに気付かないなんて、へんね。主人はお店の常連だった。奥さんを病気で無くしたの。男を無くした私と関係が出来るまで、それ程時間はかからなかった」

短くもない煙草を灰皿に捻り消し、紗季子は銀さんに背を向けた。

「突然、10歳の子の親になっちゃったのよ。おかしいでしょ？ あの子、とてもいい娘だった。後妻の私を実の親のように慕ってくれた。それなのに…それなのに、どうしてこんな事に…」

ぽつん

ぽつん、ぽつん

暗い廊下に、雨粒のような染みがふたつ、みつつ。

静かに落ちては小さな染みを作っていた。

紗季子の涙だった。

気がつくと、銀さんは紗季子を後ろから抱きしめていた。

大丈夫

大丈夫だって…